

小児皮膚科三昧 30 年

馬場 直子

この3月で神奈川県立こども医療センター皮膚科に赴任してきて30年になる。皮膚科医になって初期の10年は大学病院および市中病院で、皮膚悪性腫瘍やリンパ腫を専門にしていたので、小児の皮膚をみることはほとんどなかった。縁あってこども病院に一人医長として赴任してきて、あまりにもこれまでみてきた大人の皮膚疾患と違うことに驚き、戸惑った。また実際に話をするのは患児本人ではなく親であり、小児科医になった気分だった。自分自身も2人の幼児を育てながらの勤務であったが、さらにもう1人を授かり、最小限の産休中は大学から日替わりで代診を派遣してもらい急場をしのいだ。そのころは妊産婦でも当直免除などはなく、乳幼児3人を抱えての一人医長は相当きつかった。しかし、患児の母親の気持ちはよく理解できたし、自らの育児経験がずいぶん助けになったと思う。

振り返ってみると、自分が患児たちのためにしてきたことよりも、患児やその家族から教わったことのほうが実はずっと多かった気がする。1人1人の症例がその疾患の生きた教科書であるということももちろんであるが、一方で教科書通りにはいかない不測の事態や合併症に対する臨機応変な対応力を鍛えられた。また、意思の疎通がまったくできないと思われるような子どもも、よく注視していると顔の表情や体の緊張感の変化などによってかなりいろいろな感情や意思を表現していることがわかってきた。自己表現は言葉だけではないのである。多くの疾患を抱えた子どもの親御さんたちが、皮膚のささいな異常でもなんとかならないかととても熱心に通って来られる。全身疾患としてこれほどたいへんなのに、皮膚のちょっとした疾患などどうでもよくなるのではないかとわれわれは思いがちであるが、決してそうではない。全身は治せなくても、せめて皮膚だけでも、誰の目にもみえる皮膚だからこそ治したいという親心の表れなのである。

私の敬愛する曾野綾子の『神の汚れた手』という小説があるが、その中に私の勤務するこども医療センターが登場する。冒頭で、神様が「次はどこに重い病気の子どもの授けようか」と思案の末「よし、この子はあの家庭に」とお決めになるというくだりがある。つまり、どのような先天異常の子どもにも生まれてくる理由や意義があり、無意味な存在などないということである。一家にとって宝物のようなかけがえのない子どもに生まれつきの異常があると、一家の運命が大きく変わる。子どもの病気によって家族の絆が深まる家庭もあれば、破綻してしまう場合もあることを実際に数多く目にしてきた。最初に診断をして、病名の告知や将来予想される事態について話すわれわれの役割は実に重い。それを常に自覚して当たらなければならないということを学んだ30年であった。

赴任してきたころは患児を自分の子どもだと思って診療していたが、いまは孫と思って接している。